

平成 26 年度

第 1 回

入 学 試 験 問 題

国 語

8 : 40 ~ 9 : 30

注 意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 5 試験終了の合図でやめること。
- 6 問題は各自持ち帰ること。

品川女子学院中等部

平成二十六年 中等部入学試験問題 第一回 (国語)

◆答えはすべて解答用紙に書くこと

□ 次の(1)～(5)の 線部を漢字に直しなさい。

- (1) チイキの行事に参加する。
- (2) アタタかいスープを飲む。
- (3) コウセイな判断をする。
- (4) 文化祭のショウタイケンを渡す。
- (5) 原因をスイソクしてみよう。

三 次の(1)～(5)の問いに答えなさい。ただし(1)～(3)はひらがなでもよいが、(4)(5)は漢字で答えること。

(1) 下の意味となるように、空欄に生物の名前を入れて慣用句を完成させなさい。

□の額ほどの土地。…せまい

(2) 下の意味となるように、空欄に体の部位を入れて慣用句を完成させなさい。

彼に何を言ってもものれんに□押しだった。…なんの手ごたえもない

(3) 下の意味となるように、空欄に語を入れてことわざを完成させなさい。

「□の道も一歩から」…成功するために手近なところから努力を始めよう

(4) 線部の語の対義語(反対の意味の語)を答えなさい。

話し合いの時間を短縮します。

(5) 次の文の空欄に漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

うまくいっている時こそ、油断□□です。

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「」。「」記号などを字数にふくみます。)

「大人になる」ための要件というと、人は責任感を持つたの、社会的役割(選挙)を引き受けるだの、とかく「きれいごと」を語りがちだが、私見では多くの場合、大人になるとはすなわち感受性も思考も凝り固まっていくことである。

これは、さまざまな要素に目配りをして総合的判断を下せる能力と表裏一体をなしているが、現実的で円熟した判断とは、往々にして因習的で定型的な判断、共同体の一員として生きていける「賢い」判断であることが多い。大人の入り口に立っている若者たちの耳に、自分の貧乏な経験から、絶えず「世の中そんなに甘くない」と言い含める大人が多いのは困りものである。

サルトルは、感受性や思考が型通りになってしまった人間を「くそまじめな精神(esprit de sérieux)」と呼んで最も軽蔑した。「くそまじめな精神」は、自分や他人の「本質」から何もかも引き出そうとする。Aは「信用のおける男」だから信じていい、Bは「卑劣な男」だから付き合ってはならない、Cは「軽薄な男」だから用心しなければならぬ、というように。だが、じつは一人の人間がなぜあるときある行為を実現するのか、そのメカニズムは、まったくわからないのだ。ある行為の「原因」はほぼ無限大であり追跡不可能であるのに、われわれは行為の「あとで」その「握りの要因を「動機」として選び出し、「それらが行為を動かした」というお話をでっち上げているだけなのである。

動機ばかりではない。じつは世の中で解決済みとみなされている因果律、意志、善悪、自由、存在など、いったいこれらの概念が何を意味するのか、いまだに全然わかっていない。哲学をしてよかったことは、世の中のほぼすべての事柄は厳密に考えれば何もわからないのだ、ということが身体の中からわかったことである。

とくに哲学にのめり込まなくても、青年のころは多少こういう実感も持つものだが、大人になって厳しい世間の風や波に身も心もすり減らされていくうちに、そんなことはどうでもよくなり、「とにかく生きなくては」という言葉がすべてをな

ぎ倒してしまふ。だから、そうならないように、いまから身を引き締めておこう。

一抹の不安とともに、いままさに人生に船出しようとしているきみは、すばらしい可能性を秘めている。それは、きみは希望を捨てず努力すれば何でもできるという無責任な激励ではなく、きみがどう生きていくかはすべてきみの手中にあるということだ。きみが自分を「才能のない人間」と決めることはそういう自分を選ぶことであり、自分を「もてない男(女)」と決めることはそういう自分を選ぶことである。

この意味で——サルトルとともに言えば——誰でも否応なく「自由」なのだ。だから、すべてを誰かのせいにするのもきみの自由である。面倒なことは考えずに、自分を物のように固めていくのもきみの自由である。すべてを諦めて幽霊のように生きるのもきみの自由である。だが、そういう選択の積み重ねはきみから生きる力をそぎ、きみをますますせ細らせるであろう。それは、安全で無難かもしれないが、つまらない生き方ではないだろうか。

学力の低い親のもとに生まれたから、教養のかけらもない環境に育ったから、魅力的な肉体の遺伝子を受け継がなかったから……自分はこんなにもだめ人間なのだ、ときみは言う。だが、とにかく人間のことは皆目わからないということを感じてほしい。

その中で、きみは自分の本質をそう決定し、それが人生を規定すると解釈したのでから、その責任はきみにある。自分の「だめさ」を固定してそれを親や状況のせいにしたのはきみである。その意味で、きみは自分を「だめ人間」として選んだのだ。だから、きみは未来永劫にわたって「だめ人間」になるであろう。

だが、何が一人の人間の行為やあり方を決定するかは、じつのところまったくわからない。だから、どんな人でもどんな瞬間でも、「いままで」を完全に断ち切つて新しいことを選べるのだ。

こうした大枠のもと、最後に大人になるための条件を挙げておこう。

大人になるとは、ひとり立ちすること、すなわち親やその他の保護者から独立することである。独立とは主に二つの要件から成っている。一つは、経済的に独立すること。何らかの社会的に認められる仕事をして金を稼ぐこと。これはいいだろう。

だが、もう一つ、これと同じくらい重要な要素がある。それは、金銭面以外でも他人に依存しない生き方を実現することである。すなわち、自分に居心地のいい人間関係を自力で開拓すること。きみが孤独が好きならそれを自力で達成すればいい。本当は人恋しいのに孤独を気取っている限り他人は介入するが、きみが本当に孤独を欲しそれに満足しているのなら、他人はきみを抛つておいてくれるであろう。孤独に徹するのもいいが、一般的に言つて、多様な人との付き合いはきみを豊かにしてくれる。

だが、この際とくに言っておきたいのは、きみと異質な人々を切り捨てるのではなく「大切にすることである。彼らがたとえ理不尽にきみに敵対的であっても、そういう人々との困難な「交流」は長い人生において真にきみの宝になるであろう。

⑨ これらの二要件を満たしていれば、もうきみは大人の入り口に立っているのだが、あえてこれらに先ほど強調した一要件、すなわち、きみがどんなに過酷な境遇にあろうと、なるべくそれを他人のせいにならずに「私(ぼく)が選んだのだ」と自分に言い聞かせる姿勢を付け加えておきたい。この要件をそなえていけば、きみは特別偉くならないかもしれないし、金持ちにならないかもしれないけれど、強く柔軟で深みのある大人、すなわち「よい大人」になるように思う。

(中島義道『非社交的社交性』より)

注1 「因習的」……古くからの習慣やしきたりに、そのまま従うさま。

注2 「サルトル」……フランスの哲学者。

注3 「因果律」……すべての結果には原因があるとする考え方。

問1 ― 線①「これ」の指示内容として、最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、自分の社会的な役割を自覚し、周囲を見渡して総合的な判断をすること。
 イ、「きれいごと」に疑問を持たずに、信念を持って行動すること。
 ウ、責任感に縛られることなく、自由に動ける能力を持つこと。
 エ、決まりきった考え方をして、日常に疑問を持たないこと。

問2 ― 線②「困りものである」と筆者が述べているのはなぜだと考えられますか。最も適切と思われる説明を次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、大人自身がしつかりしないと、若者に説教をしても本当のところは伝わらないから。
 イ、若者は立派に成長しているのに、大人がそれを認めようとしないのは残念なことだから。
 ウ、自分個人の経験が若者にも通じるわけではないということに、多くの大人が気づいていないから。
 エ、大人になるということの意味を理解していない人ばかりで、自分の貧しい経験を自慢する人が増えているから。

問3 ― 線③「本質」について、本文中の別の部分で筆者がこれを言い換えている語句を、6字でぬき出して答えなさい。

問4 ― 線④「そんなこと」とは、どんなことですか。説明しなさい。

問5 ― 線⑤「すばらしい可能性」とは、どういうことが「すばらしい」のですか。本文中より25字以上30字以内でぬき出し、初めと終わりの5字を答えなさい。

問6 ― 線⑥「そういう選択」とは、どういう選択ですか。最も適切と思われる説明を次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、危険が少なく、面倒なことを避ける選択。
 イ、自由を重視し、他人の意見を参考にしない選択。
 ウ、自分自身が持つ特質を大切にしない、魅力のない選択。
 エ、他人の目を気にして、なるべく目立たないようにする選択。

問7 ― 線⑦「つまらない生き方」について、なぜ「つまらない」と言えるのですか。わかりやすく説明しなさい。

問8 ― 線⑧「多様な人との付き合い」の具体例として、最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、様々な年齢や職業の方々と分け隔て無く付き合い、自分の器を大きくする。
 イ、なんでも言い合える関係を積極的につくり、自分の殻に閉じこもらないようにする。
 ウ、相手が自分から見て理解できない人であっても、付き合いをやめずに保つようにする。
 エ、自分とは意見の合わない人と無理にでも付き合い、将来の生き方を限定しないようにする。

問9 ― 線⑨「これらの二要件」とはなんですか。説明しなさい。

四 体育教員満田先生の異動が決まり、陸上部の新顧問は美術教員の上原先生になりました。中学駅伝大会は、陸上部だけでなく学校全体から足の速い生徒を集めて出場する一大行事です。何としても県大会に進出したい陸上部部長の榊井は、新顧問を頼らずメンバー勧誘に動き始めました。陸上部は、榊井（3年）と設楽（3年）と俊介（2年）の三名。メンバーはあと三名必要です。榊井は乱暴者の大田にひるまず声をかけて勧誘に成功し、今は、吹奏楽部の渡部にも粘り強く声をかけ続けています。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「」。「」記号などを字数にふくみます。）

あと二人。あと二人加われば、県大会を目指せる。ところが、そこからはなかなか進まなかった。

「あーあー、あいつつて本当頑固だよな」

夏休みに入つて、音楽室に俊介と通い始めて一週間。今日も渡部に駅伝などやらないとあつけなく断られた。

「でも、そういうところが長距離にも向いてるでしょ？」

俊介はなぜか渡部が気に入ってるらしく、むげに断られてもへこたれることはなかった。

「根気は相当ありそうだけどな。あいつ毎日飽きもせず同じ曲ばかり吹いてるし。音楽って飽きないのかな」

おれが言うのに、俊介は、

「確かに。毎日聞かされて、僕までカヴァレリア何とかを歌えそう」と笑った。

「カヴァレリア何とかってなんだよ」

「渡部先輩が吹いてる曲。ややこしくてちゃんと題名覚えられないけど、結婚した男の人が昔の恋人をまた愛してしまうオペラの歌なんだって」

「よく知ってるな」

「渡部先輩に聞いただけです。あれだけ毎日聞かされたら、何なのか知りたくなるし」

「まあ、そうだな」

そう言いつつ、おれは内心少し驚いていた。俊介が何を吹いているのか渡部に訊いていたことに。そして、自分がそんなことを気にも留めていなかったことに。

「何かいい手はないかな」

俊介がつぶやいた。

そうだ。いつまでもこんなことを繰り返している場合じゃない。少しでも早く何とかしなくてはいけない。夏休みにメンバーを集めて走りこんでおかなくては、駅伝では通用しない。大田ですら、「おい、てめえ、俺だけ勧誘してんじゃねえぞ」といらついていた。みんな焦っているのだ。それはわかっていても、いい方法は思いつかなかった。

「そうだ、上原先生に頼んだらどうか」

あれこれ考えているおれに、俊介が提案した。

「上原先生に？」

「上原先生は美術で、渡部先輩は吹奏楽部だし、同じようなことしてる人から言われると効果があるんじゃないかな」それはあるかもしれない。しかし、俊介に手伝ってもらっているうえに、まだ誰かに助けてもらうのはどうだろう。部長としてあまりにふがいなくないだろうか。

「顧問なんだからやつてもらえばいいんですよ」

「まあ」

「前は満田先生がしてたんだから、上原先生がメンバー集めるのが普通です」

「そっか。……そうだよな」

「そうそう。さ、頼みに行きましよ」

「ああ、そうだな」

④ 気が引けるのを感じながらも、俊介の意見に乗っかるしかなかった。

渡部は厄介なやつだし嫌がるかと思っていたけど、上原は「そういうのやつてみたいと思ってたんだ。やつと出番って感じ」と嬉しそうに引き受けてくれた。そして、その二日後、渡部は練習に参加した。

「簡単でしたね」

渋い顔をしながらやつてきた渡部を見て、俊介はこつそりと言った。

「本当に」

あれだけ時間がかかったのが嘘みたいだった。どうしておれではだめだったのだろう。おれの誘い方がまずかったのだろうか。おれが頼んでもやりたいとは思えないのだろうか。喜ばしいのに、釈然としなかった。

「ただ渡部君が来てくれたってだけで、あんまり良い手は使っていないだ」礼を言うおれに、上原はそう肩をすくめた。

一緒に練習してみて、渡部の完成された走りに目をみはった。メリハリがあるのに、乱れることなく最初から最後まで走りきる。渡部が入って、県大会はぐつと現実味を帯びた。あと一人だ。あと一人で六人そろろう。

⑥ 最後の一人は、決めていた。駅伝練習で空気が重くなるたびに、こんな時にジローがいたらなんと何度も思った。

ジローと最初に何かをしたのは修学旅行だ。学校では合唱祭や体育祭など、行事のたびに実行委員会が作られる。修学旅行の時、ジローが一組の、おれが二組の委員長だった。

一組二組合わせて六人の実行委員で修学旅行を仕切る。旅行までの準備をし、旅行でみんなの前に立つて引つ張るのが仕事だった。

「あとは、レクリエーションのクイズの賞品作れば終わりだっけ」

「いや、まだ『きまりのプリント』も用意しなきゃ」

旅行に行くまで、実行委員会は度々行われた。細々した準備に話し合い。やることが多くて、みんなうんざりし始めていた。

「前で仕切ればいいだけかと思ったら、行くまでに地道な仕事が多いんだよなあ」

「そうそう。しかも、この苦勞がみんなに伝わらないってのがむなしいね」

旅行が近づいて、みんなが愚痴を言うことも増えていた。

「そう言わずにがんばろうよ。何でも苦勞した分、楽しいっていうからさ」

一組の副実行委員長であるあかねちゃんが景氣よく言うのに、

「そうだよ」

と、おれも同意した。

⑦ 小学校の時はいろんなことがそのまま楽しかった。けれど、大きくなるにつれて、少しずつ楽しさの持つ意味が変わってきた。今だって仲間と笑って遊んでいれば楽しい。でも、もつと深い楽しさがあることも知っている。無駄に思えることを積み上げて、ぶつかり合って、苦勞して。そうやって、しんどい思いをすればただけ、あとで得られる楽しさの度合いは大きい。

「ほら、できたぜ」

みんなの話に加わらず、一人で黙々と作業をしていたジローが顔を上げた。

「なにそれ」

「レクリエーションのクイズの賞品。じゃーん。なんと飛びだす表彰状」

ジローが嬉しそうに色画用紙を広げると、中からドラえもんのようなアンパンマンのような奇妙なキャラクターが飛び出してきた。

「どうだ。すごいだろう」

ジローは自慢げに目を輝かせた。

「お前、本当、のん気なやつだな」

みんながやれやれと笑うのに、「だって、こういうのめっちゃ楽しいじゃん」と、ジローははしゃいでいた。

あの時も楽しかった。ジローがいれば、どんなことでも盛り上がる。ジローがここにいてくれたらどんなにいいだろう。おれだけじゃない。みんながほっとするはずだ。

「梶井君、あと一人はもう決めてるんでしょ？」

解散後に上原が訊いてきた。

「えっと、ジローがいいかなと思ってるんだけど」

「そっか。うん。なんかよさそう」

誰がどれくらい走れるかなどわかっていない上原は、あつさりと賛成した。

「バスケの大会が終わったら、来てもらおうかなって」

「夏季大会だもんね。じゃあ、担任の先生に頼んどく」

「ああ、でも……」

「梶井君、クラスも違うし、夏休みは会う機会ないでしょ？ 小野田先生ならすぐジローに連絡とれるだろうし、私と違ってちやちやつとやつてくれるよ」

上原がそう笑うのに、どこかで⑧。ジローならすんなり承諾してくれるはずだ。だけど、そのジローに断られたらきつとおれは立ち直れない。渡部の時みたいに、手間取っている時間もない。

「そうですね」

「そうそう」

これでいいのだ。上原はほくほくとうなずいているし、その分走りで返せばいい。おれは「お願いします」と頭を下げた。夏季大会が終わった二日後からジローは練習にやつてきた。元気いっぱいジローの姿を見るだけで、何もかもがうまくいきそうな気がした。

少し前までは、何も始まらないんじゃないかと思っていた。どうすればいいのかもわからず、うろたえていた。でも、こ

うしてメンバーがそろった。これで県大会が目指せる。ようやくスタート地点に立てたのだ。

しかし、おれの身体は前よりも崩れていた。野外走をしても、後半に差し掛かると身体が重くなった。こんなことは走ってきて初めてのことだ。

貧血かもしれないという思いが、頭の中にちらついた。貧血は運動をしている中学生にとって、珍しいことじゃない。入部したてのころ三年の先輩もなっていたし、バスケ部の佐々木も去年貧血で病院に通っていた。いや、まさかな。おれは健康的な生活を送っているし、母親は栄養バランスに気を遣ってごはんを作ってくれている。貧血になんてなるわけがない。今は夏の暑さで疲れやすいだけだ。夏が終われば、元通りになる。

「いいメンバーがそろったね」

おれの横を走っていた設楽が後ろを振り返って言った。

六人がそろって五日目の野外走。俺と設楽の後ろでは、俊介と大田と渡部、それに楽しそうに走るジローがいる。

「そうだな」

「これで県大会も狙えるね」

設楽が珍しく強気なことを言うのに、おれもしっかりとうなずいた。

(瀬尾まいこ『あと少し、もう少し』より)

注「顧問」……団体などで、相談を受けて助言を与える役目を務める人。

問1 俊介が、――線①「長距離にも向いている」と言ったのは、渡部のどのような様子に注目したからですか。解答欄に当てはまるように2字の熟語を本文中から二つ抜き出して答えなさい。

□□で、□□がある様子。

問2 — 線②「こんなこと」とは、どのようなことですか。最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、何日にも渡って渡部に駅伝メンバーになつてもらえるように頼みに行き、断られ続けること。
- イ、陸上部部長であるにも関わらず、下級生部員の俊介の前で、渡部に軽くあしらわれてしまうこと。
- ウ、駅伝の準備に集中して走り込むべき練習時間に、毎日ぬけ出して音楽室でのんびりしていること。
- エ、下級生である俊介のアイディアが浮かぶのを待つばかりで、先輩らしい提案ができないでいること。

問3 俊介が、——線③「上原先生に頼んだらどうか」と提案したのはなぜですか。適切なものを次の中より二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、榊井先輩は頼りなくて、あれこれ考えてもいいアイディアが浮かばないだろうとあきらめたから。
- イ、怖い大田先輩もいらし始めたので、とにかくすぐに他の人に協力を仰ぐしかないと考えたから。
- ウ、美術と音楽という同じ芸術分野に関わる人の発言なら影響力があり、渡部の気持ちが動くと思ったから。
- エ、陸上部顧問になった上原先生は、前顧問の満田先生と同じように駅伝メンバーを勧誘すべきだと考えたから。
- オ、上原先生は、渡部が厄介なやつだということを知らないで、説得を頼まれれば断らないと思ったから。
- カ、新顧問になった上原先生は、皆に頼りにされたいと思っているので、仕事を頼まれると喜ぶと思ったから。

問4 榊井が、——線④「気が引ける」と感じたのは、なぜですか。説明しなさい。

問5 — 線⑤「その二日後、渡部は練習に参加した」とありますが、この時の榊井の気持ちの説明として、最も適切な一文を本文中からぬき出し、初めの4字を書きなさい。

問6 — 線⑥「最後の一人は、決めていた」とありますが、榊井が最後の一人をジローに決めていたのはなぜですか。説明しなさい。

問7 — 線⑦「少しずつ楽しさの持つ意味が変わってきた」とは、どのように変わったのですか。70字以内で説明しなさい。

問8 — 線⑧には、どのような言葉が入りますか。最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、がっかりした
- イ、不快になった
- ウ、ほっとした
- エ、満足した

問9 — 線⑨「しっかりとうなずいた」時の、榊井の気持ちを説明するものとして、最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、体調が悪く、貧血かもしれないということを相談したが、話すタイミングを逃してしまったと困惑する気持ち。
- イ、珍しく強気な姿勢で協力してくれた設楽のおかげで、新メンバーがそろったことを思い、感謝する気持ち。
- ウ、実際に六人で走ってみて、駅伝メンバーを率いていく重圧に改めて気づき、不安が募ってくる気持ち。
- エ、駅伝メンバー六人がそろって、県大会進出も夢ではなくなると実感し、一段と意欲が増してくる気持ち。

④印の部分は何も書かないこと

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	

[illegible]

受験番号		
1	1	1
2	1	1
3	1	1
4	1	1
5	1	2
6	1	2
氏 名		

14 品 11 43 10

四

[illegible]

がある様子。

四

